

福島の再生可能エネルギーへの取り組みを見て

奥田さが子

4月8日・9日、NPO市民電力連絡会(都内全域の市民エネルギー団体の集合体)の「福島復興再生可能エネ探訪ツアー」に参加した。(天ぷら油の廃油使用の「天ぷらバス」で)

NPO野馬土の小高の発電所、井田川の風力発電所候補地、えこえね再エネの里(南相馬)、KTSC発電所(川俣町)、農民連霊山発電所、飯舘村電力伊丹沢発電所など、2日の日程で福島各地を駆け回り、メガソーラー、中小発電所からソーラーシェアリングまで様々な取り組みを見てきた。

桜には早かったが、梅がまだ盛りで春の花がいろいろ咲き始めていた。福島は豊かな自然に恵まれた地であることを実感する。が、原発近くや他の場所でも、バスの中で放射線測定器がなりっぱなしのところがあちこちにあり、町並みに人影はなく、失われたものの大きさにあらためて胸をつかれる。

でもこんな中で、なんとかふるさとで生き、再興することはできないかと様々な努力を続ける人たち。それぞれの地で出会った人たちは本当に魅力的だった。各箇所の詳しい状況はホームページや資料で見えていただくほうがつたないメモより正確なのでそちらに譲り、感想を中心に述べたいと思う。

ソーラーシェアリング

太陽光パネルの下で、作物を作り、光を分け合っていくこと。農地と太陽光発電の共存で、農業再生と地域活性化をめざす。そのためにパネルの大きさや角度、高さなど、さまざまな試行錯誤をしながら取り組んでいるのがひしひしと伝わって印象的だった。



上の写真は、南相馬ソーラーシェアリング。下で栽培しているのは菜の花、大豆、カボチャなどだが、パネルがなかった状態の8割以上の収量があることが認可条件だということで、まだ実践例が少ない中で事業を始める障壁のひとつになっているようだ。こんな事故のあった福島ですら、前例のないことを始めるには役所がなかなかいい顔をしないとのこと。もう農作地として使うことは考えられない原発近くの農地ですら、「農地法の関係で」ソーラーパネル設置に始めは難色を示され手続きが大変だったという。現在は「特区」扱いになり比較的やりやすくなっただが・・・。

(野馬土 <https://nomado.jnfo> えこえね南相馬 <http://www.ee-minamisoma.jp/> KTSE 合同会社、

福島県農民連、飯館電力はネットで検索してほしい。)

風力発電

これはまだ形になってはいないが、原発近くの浪江、中浜などの地区に丸紅、GE など？が風力発電を造る計画があるとのこと。地産地消の電力として、地元に戻元するというのではなくオリンピックまでに造って東京に送電し、自然エネルギー電力大会をアピールするということらしい。人の住めない不毛の地になってしまったところに自然エネルギーの基地を造るというのに反対ではないが、大企業の金儲けの場や「国威掲揚」のためではなく、そこに住んでいた人たちとの話し合いを進め、地元はその利が還元できる形を探っていくべきではないのか。(下の写真は、井田川風力発電候補地)



石炭火力発電

今回見学地には入っていなかったが、福島県の主な石炭火力発電所は5基 6870 メガ (687 万 kW)。そこに、さらに新規の火発計画が6基 2400 メガ (240 万 kW) あるそうだ。福島は「脱原発エネルギー県」をめざしているが、あえて「自然エネルギー」でなく「新エネルギー」と言う言い方をしている、そこには石炭火発も含まれるというごまかしがあるという。けれどこれに対する反対運動は非常に弱く、議会でも問題にしているのは共産党のみという状況だとのこと。

メガソーラー

今回バスの車窓からたくさんのソーラーパネルを見た。大中小様々な太陽光発電所が激増していることを感じさせられたが、いろいろな問題も感じずにはいられなかった。

見学したところは、福島で生きていくために知恵と力を集め、必死の努力をしている人々のところだったが、東電はじめ様々な大企業のメガソーラーも増えており、環境や景観の問題などが起きているところもあるという。送電網は東電などが握っており、今の制度では、その腹ひとつで中小は買取中止されて生き残れなくなり、原発から再生可能エネルギーへ変わっても大企業の儲け優先で地元がないがしろにされる構図は変わらない、という心配も小さくないとか。

消費者であるわたしたち、自然エネルギーを使いたい大都市の住民にとっても大きな問題、環境破壊し、金儲けの自然エネルギーは望まないと声をあげていくべきだろう。